愛とは

漫珠沙華

先生は、山の奥に住んでおいでです。大きな大きな木をくりぬいた家に、いつもおります。

一人ぼっちなので、それを見かねた母がぼくにお世話役を頼んできました。前はお隣のおばあさんがやっていたのですが、腰を痛めてしまって。

「先生、先生」

来た時は決まって、先生のドアを三回ノックします。するとわかっていたかのように先生が中から出てきました。

先生はぼくの母と同じぐらいに見えます。けれども、お隣のおばあさんよりもずっとずっと、長生きなのだそうです。

「やあ、こんにちは。今日もすまないね」

「いいえ、これがぼくのお仕事ですから」

先生の窓に飾ってあった花はすっかり枯れてしまっていた。先生はこの野花をしきりに世話をして、話しかけていました。

まるで、ぼくの父が母にするみたいに。

「花が枯れてしまっています。新しいものを持ってきましょうか」

「いいや、大丈夫だよ」

先生は眉根を下げて、眼鏡の縁を触りながら窓を見ました。昼時だからか、それとも眼鏡のレンズ越しだからか、目を細めています。

「……あの、先生。一つ尋ねても、いいでしょうか」

「もちろんだとも。長い話になるだろうからね、中でお茶でも飲んでいかないかい」

「はい、そうさせていただきます」

家の中に入ると、ドアのそばには重そうなスーツケースがありました。その隣に荷物を置きます。先生はキッチンの方から、透明なポットを持ってこられました。その中でゆらゆら揺れる水が、太陽の光を反射してきらきらと光っています。

「ハーブティーだよ。この中に葉っぱが入っているだろう。これがいい香りでね。そこの森でとれたものなのだけれど」

「ハーブティー。飲んだことないです」

「そこに座って待っておいで」

ぼくはいつものように、椅子に座って待ちます。

家の中は、前より少し散らかっていました。棚にある壺や箱、食器は相変わらず埃一つもありませんが、床には先生の服らしきもの、本がちらほら落ちています。飲んだらお礼に

片づけてあげようと思いながら、足を揺らしました。椅子が高いせいで、ぼくの足が床につかないのです。

はい、と先生はカップをぼくの前に置いてくれました。黄緑のお茶がありました。カップは陶器でできていて、蔦と花の模様がとてもきれいです。

「い、いただきます！」

口をつけてみると、苦いものでした。けれどもほんのりと甘く、さわやかで、大きな荷物を運んできた疲れが消えていくようでした。

苦いものは、大人の飲み物です。

「どうかな。苦いかな」

「苦いです。でも、美味しいです。大人になった気分です……」

先生はふふ、と微笑まれました。近所の大人がするような、少しだけ見下したものではありません。

「先生、ありがとうございます」

「……言っておくけれども、私はきみの先生になったつもりはないよ」

今日はやたらと眼鏡の縁に触ります。いつもはそんなことないのに。

ぼくは先生のことが好きです。両親の次に。近所の同じぐらいの子たちや大人たちはぼくのことを「背伸びしてるチビ」とバカにしますけれども、先生は違います。これは何か聞いても、全部きちんと答えてくれます。

だからこそ、ぼくは敬意をこめて「先生」と呼ぶのです。

「ぼくが呼びたいからこう呼んでいます。学校の先生よりも物知りで、教え方が上手くて、まっすぐ向き合ってくれる。とっても先生らしいです」

「……そうかな」

先生は困ったように笑って、ハーブティーを一口飲まれました。

「……ああそうだ、今度から旅に出るから、しばらくはここを空けるよ」

「え……？」

旅に出る。

冬の熊のように、ずっと引き籠っている先生が。

「だ、大丈夫なんですか……？　ご飯とか」

「うん。『愛』をね、探しに行くんだ」

先生は花瓶を見つめていた。

「それは、どのぐらいですか」

「わからない。ひと月かもしれない。一週間かもしれない。一年かもしれない。一日で終わるかもしれないし、もっともっと長いかもしれない」

先生がいなくなる。その事実にぼくは頭が痛くなりました。壺で頭を殴られたようです。

「せ、先生」
「ごめんね」
なんとかして引き留めよう。そう開いた口は、他でもない先生によって塞がれてしまいました。
悲しそうな笑顔でした。
笑顔とは嬉しいときにするものです。けれども、先生は、悲しそうでした。ぼくは何も言えなくなって、うつむきました。
「先生は、先生は。新しい花を探しに行かれるのですか」
あの花は、道端のどこにでも咲いている中の一つでした。けれども先生はきっと、適当に摘んできた花では満足されない。そういう確信がぼくの内にありました。
「あの子は……今回は花だったけれど、次はなんだろうね。まだ魚には生まれ変わっていなかったかな」
眼鏡をかちゃかちゃ言わせながら、棚を眺めています。
「……」
あの子。花。魚。
関係なさそうな単語と、成っていない言葉に、ぼくは首を傾げました。あの子、はきっと人間でしょう。花になんてなれません。花より魚が人間に近いと先生は教えてくれましたが、人間が魚になった、なんて話は学校のどの本にもありません。
「だから、しばらくこの家を君に預けようと思う。掃除、頼めるかい」
「ええ、ああ、はい……」
先生のいない、先生の家を想像してみました。ひどく寒気がしました。ハーブティーが冷えていたからでしょうか。
「わかりました。それで、その。いつ行かれるのですか」
「明日にでも」
先生はまたちらりと花瓶の方を見ました。
「……あの花瓶に、何か花を、」
「ダメだよ」
言葉をかぶせるように言われてしまいました。
「ダメ」
二回も言われてしまいました。ぼくはまたうつむいて、蚊のなくような声で「はい」と言いました。
「あれは、あの子の居場所だったから。ダメだよ」
「ごめんなさい……」
ぼくから見たら綺麗なだけの花瓶ですが、先生にとってはそうでもないようです。
「……いきなり怒ってしまってすまないね」
「いえ、先生の大切なものに触れようとしたぼくが悪いので。ええと、先生、掃除するとき、棚のものに触れても大丈夫でしょうか？　きっと長旅になるでしょうから、埃まみれにな

ってしまいます」
先生は少し考えたあと、眼鏡の縁に触れました。膝が少し上下に揺れています。
「ああ、構わないよ。お願いしようかな」
ぼくは思い切って、ハーブティーを一気に飲んでしまいました。苦かったけれども。
「苦くなかったかい？」
「苦いけれども。先生が、ずっとうずうずしてらしたから」
「あ、ああ……すまないね、全く。こんな年になっても、どうやらあわてんぼうは治らないらしい」
「先生」
カップをソーサラーに置きました。ちん、と小さな音がします。
「ぼくにとって愛がどういうものか、わかりませんけど。でも、先生にとっては、きっと何よりも大事なものでしょう。宝物なんでしょう。だったら、すぐにでも探しにいきたいに決まっています」
先生の言う愛は、きっと『あの子』で。『あの子』は、色んなものに姿を変える。そのたびに、先生は旅に出る。
『あの子』を、見つけるために。
「先生、もう行ってしまわれた方がよいでしょう」
「……きみは、知らないうちに大人になっていたのかな」
先生は、少し寂しげに微笑みました。そして、「荷物は好きに使ってくれて構わない。あとは頼むよ」と言い残して、玄関のスーツケースを持って家を出て行ってしまいました。その背中を見送って、ぼくは椅子から立ち上がりました。
ぼくが椅子に座っても床に足がつかなくなった頃、先生は大きな水槽を持って帰ってきました。水槽には、どこでも釣れそうな川魚が悠々と泳いでいました。